



京都知的障害者福祉施設協議会
京都市上京区猪熊通九太町下ル中之町519 京都社会福祉会館202 <http://kyotifuku.jp>

発行人 矢野隆弘

- ◆ 本会会員事業所における虐待事件について 1
- ◆ 『襟を正す...』だけでいいのだろうか? 2
- ◆ 第51回 近畿地区知的障害関係施設職員研修会に参加して 3
- ◆ 広報部会 施設見学研修報告 4
- ◆ シリーズこんには 6
- ◆ 障害者支援施設部会研修会を終えて 7
- ◆ 第1回 日中活動支援部会研修会報告 7
- ◆ ミニコンサートの集いを終えて 8

本会会員事業所における虐待事件について
〜2月24日緊急施設長会議趣旨説明より〜

京都知的障害者福祉施設協議会

会長 矢野 隆弘

本年1月17日に「本会会員事業所における虐待事件」が新聞報道されました。本会会員事業所においてこのような事件が起きたことは、痛恨の極みであり、被害に遭われたご利用者ご本人ならびにご家族の深い悲しみと憤りに、本会として心よりお詫び申し上げます。

今回の事件は、とりわけ施設・事業所のトップが起した事件であり、本会としても、その重大さと責任を重く受け止めなければなりません。

本会としては、新聞報道を受けて、1月21日に正副会長会議を開催し、その対応を協議し、「本会としての『声明文』の発表」「事件を起した事業所への詳細な聞き取り」「施設長研修会の開催」を決めさせていただきました。

「声明文」については、当会ホームページに掲載させていただきました。また「事件を起した事業所への詳細な聞き取り」については、2月5日会長・副会長の5名で、訪問させていただきました。「施設長研修会の開催」については、本日(2月24日)「緊急施設長会議」として開催させていただきました。今回の緊急施設長会議の開催にあたり、先ほども触れましたが、施設・事業所のトップが起した事件であるということから、まず管理者である私たちが「襟を正す」ということで、研修会を緊急施設長会議という形で開催することを決めさせていただきました。

昨年秋に厚生労働省から発表された平成25年度の「施設従事者による虐待者」の数は325人となっています。そのうち設置者・経営者、管理者、サービス管理責任者など、いわゆる「管理者」が起した虐待事件の割合は21.5%70人という数字があげられており、決して少ない数とは言えない状況です。

このことから、まず管理者のための「研修会」が必要と考えました。しかし、この「研修会」が、一事業所の「つり上げのための研修会」となってしまうといけないと思っております。

なぜ「このようなことが起こったのか」また「このようなことが起こるのか」という原因分析をとことんする必要があります。その上で、その原因分析を踏まえ、改善策や再発防止策が出てきます。

虐待事案に限らず、不適切なケア、事故、事件というものには、「誰も起こさず危うさ」が潜んでいます。「誰にでもおこる危険がある」ということです。それは人ごとではなく、いつ我が身に起こるかもしれないことです。

「人が人を支援する」ということは、とっさの行動や予期しない出来事が山ほどあるということなのです。そういう場には適切な対応が生まれやすいし、残念ながら、現実には起こってくる現状があるのではないのでしょうか。

その原因の背景には、例えば管理者のワンマンであったり、事件を起してしまいうシステムに問題があったり、見て見ぬふりをしてしまう組織の体質であったり、事件を起してしまいう労働条件であったり、人材不足であったり、あげればきりがありません。

あるフォーラムで、厚生労働省の曾根虐待防止専門官が「もしかしら事業所における虐待ゼロにするのは難しいかもしれない。でも通報漏れをゼロにすることは可能かもしれない」とおっしゃっていました。「なぜ虐待が繰り返されるのか。虐待は、誰も起こりうる危険性があり、それは衝撃的に、瞬間的に起こる。また、思わずしてしまったことを隠そうとすることが起こる。しかし、隠してしまうのではなく、やり直すチャンスが必要であり、通報漏れをゼロにする組織としての取り組みが大切である。一度隠すとその後もしつづければならない。虐待が起った

場合に事業所が適切に通報し、その教訓を生かし、解決に向けて努力し、どうしたら虐待はなくなるか、組織としてどうするかということを考えるようになる」ともおっしゃっていました。その通りだと思います。このことにより、ひいては虐待事案を減らすことができるのでしよう。

私たちが京都知福協として、色々な事案とその再発防止策、改善の過程を本当の意味で共有することができれば、虐待事案を減らすことができるでしょうし、行政の皆さんが気づかない課題も上がってくるのではないのでしょうか。

この機会に、是非、提案したいのは、そのような虐待・事故・事件などの事例を、この京都知福協の会員事業所で共有し、なぜこういうことが起こるのか、出されてきた姿をまとめて、原因分析を広い視点で行い、我々事業所が本当に気づくことができるよう、そして、事業所の立場から共有できる資料として発信する必要があります。具体的なことは、このことを実現するには、具体的にたくさん乗り越えなければならぬ課題もあると思います。例えば、虐待・事故・事件などについてどのような形で、誰に報告するのか、誰が分析するのか。果たして、実際に会員事業所から報告していただけるのか。それは、大変勇気のいることですし、その匿名性をどうするのか、など検討しなければならぬことがたくさんあると思います。しかし、現場の問題を共有し、考え続け、意識化する良い機会だと考えます。

我々事業者は、真摯に現実と向き合いながら、目の前におられる障害のある人の幸せを追求するのが私たちの仕事だと思います。今回の事件を契機に、本当の意味での私たちの役割を考え続けていくことのできる京都知的障害者福祉施設協議会になれば良いと思っております。

我々事業者は、真摯に現実と向き合いながら、目の前におられる障害のある人の幸せを追求するのが私たちの仕事だと思います。今回の事件を契機に、本当の意味での私たちの役割を考え続けていくことのできる京都知的障害者福祉施設協議会になれば良いと思っております。

『襟を正す…』だけでいいのだろうか？ ～2・24 緊急施設長会議に出席して～

社会福祉法人松花苑 みずのき
南丹圏域総合相談支援センター 結丹

施設長 沼津 雅子

この日のメインテーマは、過日起きた南丹圏域の事件を受けての「虐待防止」であった。日々、不行き届きな支援状況の気づき、改善に取り組み私も当事者意識をもって久しぶりに知福協の会議に出させていただいた。その中で何度も『襟を正す』という言葉聞いた。しかし、あまりに多く遭遇した『襟を正す』に、どうすることなんだろう？と思いつらいつつ続けている。こうした事件が起きる背景にある問題の深さに打ちひしがれている身としては答えを欲しないではおれない。言うまでもなく、『襟を正す』とは、

己実現のプロセスの洞察を経ずして、この使命は果たせないのではないだろうか。膨大な資料を提示していただいた樋口副会長のお話の中で印象に残ったのは、『性的虐待者に自殺が多い』という言葉である。なぜだろう？なぜ性的虐待者に自殺が多いのか？性的虐待に関わらず、数字で示されている通り、管理職による人権侵害、虐待がなぜこんなに多いのか?! 精神分析家の北山修氏が、日本人(特に男性)は困難な状況に遭遇した時、その場から逃げる、また裸(みそぎ)が早すぎる、などの特徴を著書、講演の中で度々指摘している。私たちは、困難な問題に直面した時の自らの向き合い方の特徴(日本人の習性)を知るところから始めなくてはならない。その作業はかなり苦しいことであるため、代わりにさっさと手で手や口をすすぐ、もしくは背中を伸ばして襟を正す(本質は変わっていない)代替行為を行い、時には消えてなくなる。問題を置き去りにしたまま…。ソーシャルワークが有効に機能するときの要素の一つに、『真実性(authenticity)』ということがある。これからの私たちは、極力使い古しの言葉に頼らず、自らの内面と対峙し、内と外が一致する言葉を紡ぎ出し表現する必要があるということである。

当日のレクチャーにあったように、未然防止のためのポイントを踏まえ実行していくことは言うまでもなく大切なことである(京都府障害者支援課佐藤課長も「その当たり前を実行してほしい」と述べられた)。このことは、決してむつかしいことではない。先進的に取り組んだところは協力的にノウハウを提供すればよい。しかし、先に私が書いたことは本来の福祉の目的の実行に必要であり、支援の質、ひいては障害のある人の生活の質を変える条件である。そのために、問題を抱えた一事業所と監督行政とのやり取りに終わらず、各市町の虐待防止センターで把握された事件を圏域総合相談支援センターは共有し、それぞれの背景にある問題の分析を丁寧に行うことが重要だと思ふ。

虐待はなぜ起きるのか、その原因と対策

(5) 制度

施設現場に求められる支援の質量に制度が伴っていない。

- 入所施設・グループホーム・ケアホームにおける、一人夜勤問題や、朝・夕の職員配置水準の低さは、早急に改善が必要。
- 労働基準法の遵守や同性介護の完全実施できる職員配置にするべき。

緊急施設長会議 資料43頁

虐待はなぜ起きるのか、その原因と対策

(3) 職員の意識・モチベーション

仕事の意味・支援者としての基本姿勢←未熟
～施設は誰のためのものか、何をめざしているのか～

社会福祉構造改革の負の部分

労働力	低い介護報酬 ⇒低賃金・過重労働 ⇒適格な人材の不足
事業者	介護報酬減⇒非正規職員の多用
現場	正規・非正規職員の格差⇒人心の荒廃

緊急施設長会議 資料42頁

第51回 近畿地区知的障害関係施設職員研修会に参加して 大会テーマ：迷ってあたりまえ！みんなで考えよう！

社会福祉法人大照学園
大照学園 厚生部

主任 石橋 麻衣

今回の研修に参加するにおいて、大会テーマから参加の意欲を掻き立てられました。あまり同職で現場にて働かれている方々とお会いする機会が少ない為、この研修で同職の方々の生の声を聞けるということもあり、大照学園にとって一つでも多く良い支援の在り方に繋がることの情報を持ち帰ればという気持ちで参加させて頂きました。

1日目 シンポジウム



中央情勢報告の後、シンポジウムでは6つの施設の現状と現場支援員の方々の「何故、福祉の仕事を選んだのか」「今までの仕事内容」「仕事上での悩みや葛藤」「当初の夢や思いとのギャップ」など、それぞれの話を聞き、自分自身にもこの提議を当てはめて自分が福祉職に就くまでの過程や、新人当初の支援方法の悩み、利用者さんとの関係づくり、仕事に対するの意気込み、意欲心などを思い出し、そしてその時と今の私の気持ちの変化に気づかされました。

次に、有限会社みかん山プロダクションの代表取締役で、吉本興業所属の芸人さんでもある、辻さんのお話を聴かせていただきました。講演では辻さんのお子様知的障がいのある長女との生い立ち、ご家族、辻さん自身のこれまでの人生について、まるで落語を聞いているかのようにお話しされ、笑いが多く聞こえる講演になりました。

私はこれまでたくさんの苦労をしてきた辻さんの話を聞きながら、辻さんの母としての娘への愛情、一人の女性としてのパワフルな生き方に何度か涙が流れました。これまで、様々な研修に参加させてもらいましたが、今回のように「笑いあり」「涙あり」の研修は初めてです。研修ノートに記録をとることも忘れ、辻さんのお話の世界に惹き込まれました。同

じ女性として尊敬でき、そして辻さんが話された中で「どんな立派な人でも、人生は一度きり」「足を少し前に出すだけで楽しい人生になる」「自分の人生、周りばかり気にせずに」という言葉が耳に残っています。

私の人生も明るく楽しい人生にしたいと強く思い、その為に自分自身の気持ち次第ということ、これからの私の人生選択しなければならぬ事があるとすればどちらの自分が笑っていられるか、どちらの自分を好きでいられるか：で道を選択していこうと意志を持ちました。

2日目、分科会では第2分科の「日中活動における生きがいづくり」に参加し、3施設の日中活動で実践されていることを聞きました。大照学園と同様な内容があれば、他施設独自でされている活動もあり、その情報を得て大照学園でも参考にし、日中の余暇活動にやりがいをもち、そのことから、利用者さんにとっての生きがいと繋がるよう支援者として今一度、日中活動のねらい、役割、目的を明確にして実践していく必要があると考えさせられ、利用者さんの毎日の生活をより充実させていくことが支援者にとってのやりがいでもあり、役割であるということに改めて思いました。

この分科会では他施設の職員とグループになり「支援者としてのやりがい」を



課題に情報を共有し交換し合いました。

今回の近畿研修では大会テーマ通り支援者において正解はなく、その為、迷って・悩んで・考えることは当たり前であるということ、そしてこの仕事において一人では良い支援はできないということと、職員のチームワークの大切さ、主役は利用者として目指す支援の方向についての共有の重要さなど、今一度支援員としての働き、在り方について気づかされたことが多々ありました。

この研修で学び得た事を自分の支援に活かしていければと思います。貴重な学びの機会をありがとうございました。

社会福祉法人 北摂杉の子会



執筆者：岩堀友計（あまた翠光園）



▲スヌーズレンルーム

2月2日火曜日、広報部員施設見学研修を実施しました。
 今回は、高槻市の北摂杉の子会が運営する多機能サービス事業所 高槻地域生活総合支援センター「ぶれいすBe」、生活介護・就労継続支援B型事業所「ジョブサイトひむろ」に広報部員9名で訪問させて頂きました。

◆北摂杉の子会の歩み

はじめに、松上利男常務理事とぶれいすBeの下幸裕施設長から、法人の歴史や施設の概要についてお話を伺いました。北摂杉の子会は「地域に生きる」の理念のもと、1999年に開設した自閉症等の発達障害のある方を中心とした入所施設「萩の杜」をその起源としています。その後、高槻地域総合支援センター「ぶれいすBe」を含む、児童発達支援事業所や相談支援事業所、グループホームの開設など、地域のニーズと共に、様々な事業に取り組みられています。

◆「ぶれいすBe」

今回訪問させて頂いた「ぶれいすBe」は2009年に開設され、現在生活介護事業40名、就労継続支援B型事業20名の方が利用されています。施設の玄関に入ると多数の木材が使用されておりとてもぬくもりを感じ、明るい雰囲気の建物でした。その中、B型の利用者さんは1階の2部屋を使って少人数で作業をされています。作業内容は菓子箱の組み立てやダイレクトメールを入れる軽作業でした。それぞれの利用者さんに合わせた支援となるようコミュニケーションカードを使用するなど工夫されています。また、作業が行いやすいように、パーテーションを使用して個別の作業スペースを作り、刺激が少ない環境のもと、各利用者さんに対し視覚的にわかりやすい環境作りも行われていました。

◆スヌーズレンルーム

2階の行動障害のある方たちの活動場所では自閉症や重度心身障害の利用者さんが使われるスヌーズレンルームも拝見させて頂きました。室内は利用者さんがリラックス出来るようなウオータベッドやブランコ、カラフルな照明と音響設備など、視覚、聴覚、触覚を使っているいろいろな刺激を感じてリラックスしてもらう空間が設備されていました。私も体験させて頂きましたが、非常に気持ち良く、落ち着いて過ごすことのできる空間だと実感しました。

◆「Cafe Be」

昼食はぶれいすBeの隣の「Cafe Be」にてランチを頂きました。Cafe Beは本格的自家焙煎コー

ヒーの島珈琲とぶれいすBeがコラボしてオープンしたカフェで、就労継続支援B型事業による就労の場のひとつとして利用もされています。今回は利用者さんが活動されている姿が見ることができませんでしたが、普段は主にカフェの接客・コーヒー入れ・清掃業務を就労の場として担われているそうです。

また利用者支援の場であることは勿論のこと、本格的なコーヒー販売のプロとコラボレーションで地域と障害のある方を結びつける新しい支援のモデルとなっているようです。

ところで、カフェに案内して頂いた時はまだ営業直後で静かな雰囲気でしたが、見学を終えて12時に戻ると店内はほぼ満席で地域のお客様と利用者さんでとてもにぎわっていました。

昼食に頂いた日替わりランチのポテトチーズオムレツなど全てのメニューは管理栄養士が考えた栄養満点の献立で、節分の日の巻き寿司、おでんなど毎日違ったメニューを季節に応じて考えておられるそうです。

通所されている利用者さんも本格的なカフェでのランチを毎日昼食として食べられるので、そんな食事も楽しみにしながら毎日通われているのではないかと感じました。

◆地域に溶けこんで

今回見学させて頂き、地域に溶けこんだカフェの外観や雰囲気をはじめ、内装、備品に至るまで、利用者さんが安心・安全で快適な生活ができるように施設環境の整備がしっかりとされており、地域との一体感のある生活や支援をされていたことがとても印象に残りました。

広報部会 施設見学研修報告



執筆者：中川 久美子 (修光学園)



◆「ジョブサイトひむろ」
 午後からは、高槻地域生活総合支援センター「ぶれいすBe」から徒歩15分の距離にあります生活介護・就労継続支援B型事業所「ジョブサイトひむろ」を訪問させていただきました。今城塚古墳公園にほど近い住宅街に立地し、広報部員の中には初めて間近に古墳を見て感動する者もありました。
 ジョブサイトひむろに到着し、管理者の森田様より、事業所の概要についてお話を伺いました。ジョブサイトひむろは、2001年に萩の杜の分場として開設され、2007年に新事業体系（生活介護・就労継続支援B型）に移行されました。生活介護事業の定員は40名、就労

継続支援B型事業の定員は10名、計50名の比較的重度の知的障害のある方、自閉症等の発達障害や行動上の障害がある方を中心に支援を提供されています。法人共通の「地域に生きる」の理念のもと、どれだけ重い障がいのある方でも地域の中でいきいきと「働き」「暮らし」「余暇を楽しむ」ことを包括的に支援すること、一人ひとりに合わせた「個別支援」を展開することを支援方針とされています。
 ジョブサイトひむろの一日は、朝の送迎サービスから始まります。萩の杜（施設入所支援、レジデンスなさはら（グループホーム））を利用されている利用者の方、地域にお住いの利用者の方を3回に分けて運行されています。それぞれ到着時間が異なるため、到着された方からその日の個々のスケジュールに沿って作業が開始されます。作業は、クリーニング、陶芸、軽作業などを、事業所内8か所に分かれて行っておられます。施設外就労もされており、福祉施設の清掃や洗濯などの業務を行っておられます。
 1階、2階のそれぞれの作業場へ案内して頂きました。2階では軽作業を中心に取り組まれています。企業から注文を受け、部品の組み立てや袋入れ、広告のチラシ折りなどをされています。週に2回ポストイング作業もあり、地域にポストイングに出られる日もあります。各自個別のスペースが設けられ、障害特性に応じてパーテーションで区切ったり、絵カードや写真、シール等でその日の作業内容を提示されるなど、あらゆる場面に個別支援の工夫がなされています。
 1階では、クリーニング作業、陶芸、軽作業に取り組まれています。軽作業を

に、一人の利用者の方がシールで袋の封を閉じる作業をされていました。黙々と取り組まれていましたが、袋をシールで挟むと指でシールの持ち手と台の上を指でなぞっておられるのが目に入りました。不思議に思った広報部員一同、近くで手元を見せていただくと、シールの持ち手と台にイラストが描かれた丸いシールが順番に縦並びに貼ってありました。シールの上を指でなぞることでシールの挟む秒数を測っておられたのです。秒数を数えることが困難な方でもシールの上をなぞり終わると挟み終わりだということが理解しやすく工夫がされており、驚きとともに、大変参考になりました。
 クリーニング作業、陶芸の作業場へ案内して頂いた時は、既に作業を終了され、休憩や送迎時間と重なってしまいました。数名の方がまだ作業に取り組みまれておられました。洗濯を終えた衣類を畳まれている方は、畳み方に納得がいかず何度も丁寧に畳み直しておられました。また、陶芸作業では、飲食店の特注の箸置きや小鉢を量産されています。数年前から自主製品も制作されており、機会があれば販売に行かれることもあるそうです。芸術大学を卒業された職員もおられ、プロの目で厳しく検品をされています。
 作業活動以外の支援としては、生活の質の向上を目指し、年間を通しさまざまなプログラムが用意されています。音楽療法、エアロビクス、トランポリンなどの活動を近所の幼稚園や高槻市の体育館などを使って実施されています。又、BMIが高い方を中心に週に一回プールへ

出かける活動も行われており、実際に健康維持につながっていると聞きしました。
 北摂杉の子会では、職員の働きやすい環境づくりにも力を入れておられます。非常勤職員も出来るだけ会議や内部研修に参加され、情報共有、意見交換を行うことで現場の支援の質の向上につながっています。又、法人内表彰制度があり、業務貢献表彰で賞を受賞することで働くことのモチベーションもアップします。法人として、利用者の方と一緒に働く職員のこともしっかりとサポートされており、このことがより良い利用者支援につながるのだと感じました。今回の見学でも、利用者の方と職員の皆さんとで力を合わせて取り組まれている姿がとても印象に残りました。

最後になりましたが、利用者の皆様、長時間に渡ってご案内頂きました常務理事の松上様、管理者の下の松上様、森田様、職員の皆様、大変お忙しい中、見学に対応頂き、本当にありがとうございました。



▲作業がしやすいように工夫されたシール



▲クリーニング作業

広報部員施設訪問記

シリーズこんにちは

社会福祉法人なづな学園 かのの木学園

訪問者：天野 真弓 (ひなどり学園)



今回は京都市中京区にある「かのの木学園」を訪問させていただきました。かのの木学園は、昭和45年4月1日に開設され、平成23年11月1日より障害者自立支援法に基づく事業に移行し、現在、多機能型事業所として「生活介護事業」「就労継続支援B型事業」「就労移行支援事業」を実施しています。当日は、就労継続支援B型事業の製パン作業を主に見学し、担当の千葉さんにお話を伺いながら施設内を案内していただきました。

製パン作業は、利用者さん6〜7名、職員さん2名とパン職人さんが1名で行われます。作業の開始は8時30分です。当日9時前に訪問させていただきましたと、利用者さんは既にユニフォームに着替え、準備を始めてもらっていて、「おはようございます！」と笑顔で迎えてくださいました。

作業室に入ると、テーブルごとでサンドイッチ・惣菜・菓子パンと作業台が分かれており、利用者さんは自分の役割をしっかり把握して、職員さんと一緒に丁寧に作業をされていました。モルダー・フライヤー・ミキサーなど製パンに欠かせない器具も置いてあり、それぞれの器具には「危険」とシールが貼られています。安全に作業をして貰うため、利用者さんが常に意識できるように視覚的な配慮からとのことでした。メインメニューであるサンドイッチは毎日作られていて、食パンにマーガリンを塗ったり、完成したサンドイッチを包装してラベルを貼り付けたりする工程が見られました。中身が崩れることなく、綺麗に袋詰めされていたので、「コツはありますか？」と利用者さんに尋ねると、身振り手振りを交えて、「ゆっくり丁寧に作業することです」と教えてくださいました。

丁寧に作業することです」と教えてくださいました。



菓子パンは20種類あり、当日製造します。惣菜・パンは、10種類近くあるそうで、前日に準備して発酵させたパンに刷毛で卵を塗ったり、ケチャップを乗せたりトッピングをします。午前の作業で作られるパンは後に紹介する「ペーカリーどんぐり」で販売します。午後は、焼き菓子作りと翌日の仕込みに当てられます。焼き菓子は、多くなつた食パンや菓子パンをラスクにリメイクするのですが、食べやすい形やサイズに切る作業をされます。仕込みは粉から製造します。①計量②ミキシング③一次発酵④生地⑤分割⑥生地⑦丸め(手作業)⑧二次発酵⑨成型の順番で行い、翌朝に焼き上げができるように惣菜パンを仕上げておくそうです。

利用者さんの作業時間は、午前は9時から休憩を含めて正午まで、午後は13時から同じく休憩を含めて16時までとなります。1階から3階までは各フロアーが別々の作業場になっているのですが、昼食の時間には4階の食堂に集まって、利用者さん・職員さんと一緒に食事をされるそうです。利用者さんと職員さんが皆で顔を合わせる大切な場所であり時間だと教えてくださいました。食堂は広く、眺望も良く、ゆったりとした空間でお昼の素敵なひと時を過ごされている様子を想像できました。

製パン作業は始めて3年になるそうですが、職員さんは事前に一般のパン屋さんや福祉施設で6ヶ月間研修を経験したり、パンメーカーが開催する教室で技術を学ばれたりしたそうです。学校で教わったのを契機に、シュトーレンと言うドイツの焼き菓子も作られているそうです。シュトーレンは年に一度、12月にクリスマス限定商品として販売され、一大イベントであると共に大事な商品の一つです。平成26年度は700本製造完売で、京都光華女子大学との地域機関連携でも、パンだけでなくシュトーレンを販売しました。

先に触れたように午前中に製造されたパンは主に1階の「ペーカリーどんぐり」で販売されます。10時30分が開店で、その前には作業をされていた利用者さんが降りて来られて、棚にパンを並べたりプライスカードを置いたり準備をされます。プライスカードやシールは店名にちなんだ、どんぐりの図柄で、お店の窓にもどんぐりの絵のマークがあり、とても可愛い雰囲気のお店です。いろんな方々が足を運びパンを買いに来られるそうです。お客さんと触れ合える販売は、利用者さんにとっては楽しみの一つで、「頑張ってる」と声を掛けて貰えることも、やりがいにつながります。人気商品は塩パンで、他には女性は、あんドーナツなどの甘い物、男性には蓮根バーガーと言った珍しいパンが人気だそうです。



製パン作業の他、各フロアーの様子も少し見せていただきましたが、陶芸・紙箱折り・縫製などの作業をされていました。陶芸は社寺からの受注で「かわらげ」の製造で、紙箱折りは各会社に納品される箱を機械と手作業で行います。それぞれフロアーの廊下にはベンチが備えてあったり、壁に利用者さんが描いた作品が飾られていたり、とてもゆったりとした温かな雰囲気の中で、皆さんが作業されていたのが印象的でした。案内をしてくださった千葉さんは、最後に「利用者さんが仕事を上達されていく様子を見られること、家族の方々にそれを報告して喜んで貰えることが何より嬉しく、やりがいを感じます」と笑顔で仰っていました。

かのの木学園の皆さまにはお忙しい中取材にご協力いただきまして、本当に有難うございました。

障害者支援施設部会研修会を終えて

地域生活定着支援センター『ふいっと』の取り組み

「触法障がい者の暮らしを地域で支える」

障害者支援施設部会 部会長 廣幡 顕一
京北やまぐにの郷 施設長

セーフティネット機能を持つ社会資源となるべき障がい者支援施設として、触法障がい者の実態や置かれていた現状を正しく理解することを目的に第2回支援施設部会研修会を開催しました。入所支援の立場として京都保護観察所の葛原勇気氏から矯正施設内における障がい者の実状や課題を交え、司法と福祉の連携を深める必要性を提起されました。

京都地方検察庁の渡辺寿雄氏からは検察庁における福祉との連携と再犯防止の取り組みについて紹介されました。また、出口支援の立場から地域生活定着支援センターふいっとの小林稔氏より、支援において対象者の状態像が罪名や前科に負けてしまい誤解を生じるケースが課題であることや本人の福祉に対する認識を深めて福祉的な支援が受けられるような環境づくりが必要と報告されました。実践報告では同センターの籠谷光彦氏より入所型支援施設へ繋いだ事例を通じて、入所支援施設の受入れ枠の問題、地域生活の受入れ、本人意思の問題と再犯を踏み留まらせる体制づくりの重要性



を報告されました。相談支援センターいづみの須河浩一氏から、2006年の下関駅放火事件や刑務所内の服役者における約3割に知的や精神に障害を抱えるという調査結果を障がい者支援に関わる者として、どう考えるか？という問いかけから始まり、支援センターで関わったケースを紹介されました。全てのお話に共通することとして、出所後に地域で暮らししていくには、安定した「衣食住」の確保、本人への福祉サービス利用ニーズを引き出すことが不可欠であるとされました。また、ストレンジスモデルによる本人の長所に着目した支援により、存在が示せる「居場所」と、必要と認められる機会と役割の「出番」が確保されるべきであると感じました。

累犯障がい者を生まない司法と福祉の連携を障がい者支援に関わる一員として、一翼を担う必要を感じながら充実した有意義な研修を終えました。最後に、今回の研修会開催に当たり日程変更により今回ご参加戴けなかった方に失礼ながら紙面にて改めてお詫び申し上げます。

第1回 日中活動支援部会研修会報告

「〜重い障がいがある方のいきいきとした

日中活動を支えるために「パートⅡ」を終えて

日中活動支援部会 部会長 三宅 州人
障害者地域活動センター乙訓楽苑 管理者

本年2月23日の午後より、京都社会福祉会館で第1回日中活動支援部会の研修会を開催し、24名の参加がありました。

今回は、乙訓ひまわり園の向支援員と城陽作業所の植田支援員に実践報告をしていただきました。

向氏は個別の事例で重度の身体障害と知的障害がある方への支援方法で、キーパーソンの重要性と支援者をどう広げていくか、そのために利用者の些細な表情も逃さず支援していくことの重要性を報告していただきました。

植田氏は今後、利用者の高齢化・重度化またご家族の高齢化に対し、支援者がどうか関わっていかねばよいかという課題を提起してくれました。どちらの報告も各施設共通の課題であり、参加者からは報告を聞いた感想や質問が出されていました。その後、1時間程度ですが、3つのグループに



分かれて、自己紹介を交え各施設の現状や課題を話しあいました。今までの施設の状況を聴く機会が少なかった職員さんが多く、各施設の話聞くことで相互理解を深めることが出来たと思います。みんな利用者に対しよりよい支援を実践したいという思いがひしひしと伝わってきました。また、利用者への支援内容の悩みとかマンパワーの不足等、具体的な話が多く、参加者からは「グループワークの時間がもう少し欲しかった」との意見も出ていましたので、今後の研修会の内容の精査及びび進行を再度検討したいと思っていました。

また、参加者より施設見学也希望も出ていましたので今後の課題として検討していきたいと思われました。今回の研修が、参加された皆さんに今後も現場で頑張っていくエネルギーになることを期待しています。

ミニコンサートの集いを終えて

飛鳥井ワークセンター センター長 川西 恒



1月20日(火) 京都府立文化芸術会館にて、京都知的障害者福祉施設協議会主催の「ミニコンサート」の集いが開催されました。今年度は、第3回の「ミニコンサートの集い」になり、京都府全域より当福祉施設協議会加盟の17施設の利用者・職員・家族が約380名、一般の来場者を合わせると400名を超える人数になり、会場も満席に近い開催となりました。

第一部のプログラムは、「カリンバとパーカッションで世界の音楽を楽しく」です。アメリカ出身で京都在住。幼い頃から音楽に興味を持ち、世界の様々な国の音楽を学び日本でも尺八などの邦楽の稽古を受け、これらと西洋の楽器を統合して作曲。音楽のマルチ・プレイヤーとして活動しているロビン・ロイドさんの演奏です。音楽療法を取り入れた笛、太鼓、カリンバ、マリンバなどを演奏し、振ったり、叩いたり、吹いたり、つぎつぎと動かして音の出る楽器が奏でる音色は、誰もが聴いていると気持ちが良い感じがするものでした。なめらかな日本語によるトークは笑いもとり会場の皆さんを楽しませていただきました。

第二部のプログラムは、「電子ピアノによる弾き語り」です。京都市立芸術大学音楽学部卒業後、京都を中心に、バンド、デュオ、弾き語り、他のアーティストのコーラスなど、様々な形態で活動を展開中でボイストレーニングやピアノ講師としてレッスンも行っている、あかしなおこさんの歌と演奏です。

『耳をすませば(カントリーロード)』のオープニングにはじまり、あかしさん

のオリジナル曲、事前のリクエスト曲からは『アナと雪の女王 (Let It Go)』、『世界に一つだけの花』が続きました。演奏後半ではロビン・ロイドさんとの共演が実現し、会場の利用者の皆さんも一体となって歌と演奏を楽しんでおられました。恒例になったアンコール曲は、震災復興ソング『花は咲く』を感情をこめて静かに聴かせていただきました。公演が終了した後の会場からは、惜しみない大きな拍手が鳴り止みませんでした。

ミニコンサートの集いも3回目の開催になり、回を重ねるごとに充実した内容になってきています。今回は、プロのミュージシャンの方に出演を依頼することができ、参加された利用者のみさんにも十分満足していただけたのではないかと思います。ミニコンサートの集いが始まった当初は、クラシックコンサート再開までのつなぎの事業としての位置づけをしていましたが、事前の申し込み施設数も多くなり、今回は、キャンセル待ちをしていただいた施設もありました。近々クラシックコンサートの再開が予定されていますが、「ミニコンサート」の集いは行事文化部会の魅力ある事業の一つとして次年度以降も位置づけできないかと考えています。

最後になりましたが、第3回「ミニコンサート」の集いの開催にあたり、さまざまなご支援をいただきました関係者の皆様には、大変お世話になりました。



編集後記

つながり

2月初旬、大学の友人達と集まりました。集まるきっかけは些細な事で、皆の変化や再会を楽しみしながら電車に乗りました。集場所は大学の最寄り駅で、車内から見える風景は学生の時見たものと全く変わらず、懐かしさを感じました。

再会した後は、ひたすら談笑でした。私と同じ職種で働いていた、既に結婚していたり、それぞれの変化や大学にいた頃の思い出など：話しは絶えませんでした。一通り話し終えた後、時計を見ると集まってから6時間は経っていました。時間はあっという間だと皆で笑いました。

他愛もない会話の中で、皆がそれぞれ今の自分と向き合っている姿を見る事で、卒業してからの自分を振り返る機会にもなりました。今回の集まりがなかったら、こんなに、自分自身を振り返ることなんてなかったなあ...と思いました。別れ際、また、皆で集まろう、そんな一言が私にとって大きな励みになり、人とのつながりの大切さを実感しました。次に会うまでにもう少し成長したいと一つ目標ができました。

新年度に向け、今までも、これから、人とのつながりを大切にしながら、新しい1年も頑張っていきたいと思います！

(大照学園 城下結季代)